

第11回 大賞(金の星賞)受賞作品

「うちゅう人からのてがみ」

茨城県 茨城高校3年 番場 絵理



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞

大賞 〈金の星賞〉

『うちゅう人からのてがみ』

茨城県 茨城高等学校三年 番場 紘理

ぼくは、あまねそう太。小学一年生。

とつぜんだけれど、ぼくにはうちゅう人の友だちがいる。友だちといつても、会ったことはない。一年前の今「」、ぼくがようちえん生の年長ぐみだった年のクリスマスあたりから、ぼくとうちゅう人との文つうがはじまた。ぼくたちが友だちになつてから、ちょうど一年。そして、大きらいな川さきゆうとがとなり町に引っこしてから、一年がたつ。

きょ年。ようちえんのげんかんへとつづくなみき道が、こがね色のいちらうでいろいろぞられていたころ。ぼくたちのようちえんで、あるうわさがながれはじめた。

ぼくたちの町に、うちゅう人がいる。

それだけでもびっくりなのに、うちゅう人はひとのすがたにへんしんして、ぼくたちのことばをペラペラとしゃべれるらしく、ぼくたちの中にこつそりまぎれこんでいるのだと。

「そう太、おれたちでさがしにいこうぜ。」

ゆうとはうちゅう人のうわさにまつ先に食いついた。元からこつき心おうせいだったし、まほうつかいやドラキュラ、ふしきなものがすきな男の子だつた。

「いいよ。いこう。」

ぼくもううちゅう人にはきょうみがあつた。それにうわさがもしうそだとしても、元氣で明るいゆうととあそぶのは大すきだったし、うちゅう人が本当にいて、出会えたなら友だちになつてみたいと思つた。

「でも、どうやつてさがすの?」

「どうやつて、つて?」

「だつてうちゅう人はひとのすがたをしているし、にほんごをしゃべるんだよ。どこにいるかもわからないのに…。」



「んー、かん?」

ゆうとはみきてのおやゆびをぐつと立てて、にかつとわらつた。

それから、ぼくたちはようかえんがおわったあとに、うちゅう人をせがしにちよくないをはしりまわる田々がつづいた。いつもいくじうえん、小さいころおかあさんとよくいったとしょかん、こどもすきのおまわりさんがいるじうばん、いつもいねむりをしているかわぐちさんのだがしやさん、おかあさんにきつけのスーパーに「ンビニ」、小学校のたいいくかんつら……。

「やつぱりかんたんには見つからないな。」

ゆうとがジヤングルジムのてっぺんにすわって空を見上げながらつぶやいた。その日もしゅうかくなし。空気はひえて、空のすんだ青はざじこまでもとぎれない。もうすぐ冬だ。

「そつだ、こんどおれのいえでクリスマス会やるうぜ。」

「どうしたの、きゅうに。」

「ふゆやすみにはいつたらようちえんいかなくてひまじやん。おれ、そういうパーティーまえからあこがれてたんだよね。」

ゆうとが少してれくさそうにわらつた。

「じゃあプレゼントこうかんしようよ。」

「お、いいね!」

ぼくたちはジヤングルジムからおつると、とおくの空のタぐれにおいつかれないように早足で家へとむかった。

「そう太、タイムカプセルつてしつてる?」

「タイムカプセル?」

「うん、たからものや、みらいのじぶんべのでがみをいれてじめんにうめるやつ。なんなんかしたらほりおこすんだって。ねえちゃんよりふたつとしうえのともだちがいま小学六年生で、そつぎょうきねんにうめるんだってさ。」「へえ、おもしろそうだね。」

「おれたちもやらない? で、ふつうのじやつまらないから、そう太は一年ごのあれに、おれは一年ごのそう太にてがみをかくつてどうかな? クリスマス会のとき、かいたてがみをうめようぜ。」

「それすごくわくわくする! やうやうやう!」



ぼくがわらつてふとゼンぼうの空を見上げたとき、七色に光るもののが空をおりていった。

もしかして……あれって……

「ひつじ?」

ぼくとゆうじが同時にさけんだ。ぼくたちは少しおどろきながら田を合わせてくわくすとわらつた。そしてもうこわじ空を見上げるとひつじは飛んでいた。

その田のよる、ぼくはみらいのゆうとべてがみをかいた。
「一年」のゆうとく。ここにちは。そう太です。うちゅう人はけつきょくみつからなかつたけど、ゆうととのうちゅう人さがし、とつてもたのしかつたよ。ぼくが、さいしょともだちがいなくてひとりであそんでいたとき、ゆうじがこえをかけてくれてとてもうれしかつた。きょうみたひつじにのつていゆうちゅう人がゆうとみたいなやせしこだつたらいいなあ。これからもよろしくね。そう太より。」

まんまるのおつきやまが、そつと、まじから家の中をてらしていた。

「そのうみたあれ、やつぱりひつじじゃないよ。」

「ぎの田、ようぢえんでかおをあわせてすべ、ゆうじがざんねんとうにひつじた。」「え、だって、ゆうじだつて見たでしょ。」

きのうの空とぶぶつたちは、ぜつたいにひつじのだ。しょうじはないけれど、かくしんがあつた。ゆうじと見つけた、きれいなひつじ。

「おれもほんとはしんじたいよ。でも、ねえちゃんがあんたばかじやないの、ひつじのなんてあるわけないでしょ、あんたが見たのはひこうきよ、つて。ちよつととおくにひこうじょうがあるらしくてさ。それきいたらみようになつとくしちやつて。」

「ひこうきつて七色にひかるの?」

「それはしらないけど、きつとたといようのひかりが…」

「でも、あれぜつたひひつじのだよ。ゆうじ、まほうつかことかすきでしょ。だつたら…」

「うん、すき。でも、やつぱりげんじつにはいられないんじゃないかな。」



「うちゅう人も？」

「うん、はつきりとはいえないけど。」

「ぼくはなんだかむしゃくしゃして、そのばかりはしつてにげてしまった。
うしろからゆうとがぼくをよぶこえがきこえたけど、むしした。」

「ぜつこうだ。ゆうとなんが、きらいだ。大きいだ。しんじてたのに。ぼくはうちゅう人がいるってしんじてたし、ゆうともそうだと思つてた。なのにゆうとは……。」

それいらい、ぼくはゆうととはなきなくなつた。さしょはゆうともぼくにいつもどおりはなしかけていたけれど、ぼくはゆうとをむししつづけたから、やがてゆうとからもこえをかけられなくなり、そのままふゆやすみにはいつた。家中ですごすまい日。こたつがあつたからさむくはなかつたけれど、すきま風がふいているみたいに、むねのまん中あたりがなぜだかひえていた。

クリスマスの日がきた。ゆうとからでんわもなく、ぼくもでんわしなかつたから、クリスマス会のよていはしじせんしようめつした。れんらくをとつたところで、クリスマス会はできない。ゆうとへのクリスマスプレゼントをかついなかつたし、一年ごのゆうとにあてたてがみは、ぜつこうするときめた日のよるにびりびりにやぶいでふうとうに入れて、かぎつきの引き出しにふういんしてしまつたから。

それからすうじつたつたころ、ぼくあてにうちゅう人からてがみがきた。たどたどしいにほんごで、たまにひらがなが左右ぎやくなつていていたけれど、心のこもつたすてきなものだつた。さしだし人のらんは〈うちゅう人より〉とあるだけで、じゅうしょはかかれていなかつたけれど、へんじをかいてぼくの家のポストに入れたら、つぎの日のおさにはなくなつていた。はじめは、だれかのいたずらだと思つた。でも、てがみのやりとりをするごとにその思いはきえていった。ぼくたちはいろいろなはなしをした。ようちえんにつたわるでんせつのこと、先生のこと、友だちのこと、かぞくのこと、テレビのこと……。わだいはつきることなく、てがみがきているかかくにんするためにポストをのぞくのがたのしみになつた。

やがてふゆやすみがおわり、三がつきになつた。ぼくはゆうととなかおりして、うちゅう人のことをはやくはなしたくてうずうずしていた。はじめ





は、ほらやつぱりうちゅう人はいるんだよ、といつてやるつもりだつたけれど、だんだんすなおにゅうとにもうちゅう人となかよくなつてもうれたら、と思うようになつたからだ。

ところが、かんじんのゅうとはようちえんにこなかつた。先生が、ゅうとくんはおとうさんのおじいとのつじうでとなり町におひつこししました。みんな、あとでがみをかこうね。といった。ぼくはしんじなかつた。

ひつこし？ うそだ。

ぼくの思いとはうらばりに、ゅうとはようちえんにこなかつた。つぎの日も、そのつぎの日も、そのつぎの日のつぎの日も、つぎの日のつぎの日のつぎの日も……。

ゅうどがひつこしをしたとしつた日からしばらくして、クラスのみんなでゅうとへてがみをかいた。

みんな、ゅうととそんなになかよくなかつた子も、そこそこながいてがみをかいていた。ゅうととなかよしだつたぼくといえば、〈ゅうとへ〉とかいたきり、えんぴつがすすまなかつた。

先生が、

「ひとことだけでもいいよ。」

と言つたから、〈大きらい〉とだけかいてていしゅつしたら、やすみじかんに先生になだめられて、もう一回かきなおしなさいと言われた。しかたがないから〈大きらい〉をけして〈げんきでね〉とかいてもう一回ていしゅつした。先生はなにも言わなかつたから、それでゅうとのもとへとぞいたのだろう。

あれいらい、ゅうとのことをかんがえることが少なくなつた。小学生になつてからはあたらしい友だちもたくさんできだし、うちゅう人へのがみをかいたり、うちゅう人からのがみをよんだりするいがいは、学校の友だちとほとんどあそんでいた。

クリスマスがちかくなつたころ、うちゅう人からいつもとちがうふんいきのてがみがとぞいた。

〈そう太くんべ。きみのむかしの友だちからてがみをあずかつてしているので、どうふうします。うちゅー人より。〉



ふうとうの中には、少し小さめのふうとうが入っていて、表には「いちねん」というのそう太へ」と書かれていた。むねがどきつとした。うらを見ると、「川さきゆうと」と名前。むねのどきどきをおさえながら、ふうをあける。

「いちねん」とのそう太へ。「んにちは。うちゅー人のうわさがあつてから、まちをさがしまわったけどみつけられなくてせんねんだつたな。でもそつ太とおもいつきりはしりまわつて、あせいっぱいかいて、ぼうけんしていみたいでおもしろかつた。まえ、おれがべんとうわすれたときおかずをわけてくれてありがとう。おいしかつた。らいねんも、もういつかいうゆー人さがししようぜ。うちゅー人みつけて、ともだちになつたら、三人でいっしょに「はんたべようよ。ちきゅうのおいしい」はんをうちゅー人におしえてあげるんだ。たのしそうだろ? ジヤあな。ゆうとより。」

ぼくはなんどもなんどもがみをよんだ。今ゆうとがちかくにいないことがさびしくて、一年前の自分がなきなくてはずかしくて、でもむねのまん中に春の風がふいたみたいにあたたかくて、ぽかぽかして、ないた。こえを出して、ようちえん生みたいにわんわんないた。

しばらくして、ぼくはふういんした引き出しをあけて、本当なら今「うゆうとがよんでいるはずのがみをひっぱりだした。ふうとうをあけると、びりびりにやぶつたてがみはまほうでなあしたように一まいのかみにもどつていて……なんてことはなく、あの日のまましつかりとびりびりにやぶられたまま。それを見ると心がいたんでまたなみだが出てきたけれど、つくえの上にセロテープをようにして、一まい一まいのかみきれを、ジグソーパズルのようにはり合わせていった。つぎはぎだらけのがみになつてしまつたけれど、ていねいに、心をこめてなおした。

ぼくはそのてがみ一まいだけをふうとうに入れて、ポストに入れた。夕はんを食べた後、おふろに入つてはみがきをして、おやのきよかをもらつて、にわに出た。ポストの中をかくにん。まだてがみはあつた。木のかげにみをかくして、もうすぐあらわれるであろううちゅう人をまつた。

まん月が空のてつぺんにのぼつたころ、うちゅう人はやつて來た。うちゅう人はうちゅう人らしくじつにのつてやつて来ればいいのに、じてん車をこいできた。はなうたまじりに、白いきを花のようによき氣中にさかせながら、ぼくの家までやつて來たうちゅう人。ぼくと回じ、おそらく小学一年生。

うちゅう人がポストからがみをとり出してじてん車にまたがったとき、ぼくは木のかげからとび出して声をかけた。

「ゆうと。」

とつぜんのよびかけに、うちゅう人は明らかにびっくりしたようすでじてん車をおしてしまった。

「そう太、これは、その……わるぎがあつたわけじゃなくて、ほんとなんだ、だまそそうとしたんじやなくて……」めん。うちゅ一人はおれだつたっていうか、いや、おれはうちゅ一人じゃないんだけど……。」

あたふたするうちゅう人を見てぼくはついふき出してしまった。うちゅう人もつられて笑って、言った。

「こうえん、行かない？」

「夜なのに？」

「夜だから、だよ。」

うちゅう人は右手の親ゆびをぐつと立てて、にかつとわらつた。じてん車をおしながら歩くうちゅう人と、となりを歩くぼくを、まん月はやさしい光でらしながら見まもつてくれていた。
「今夜は星、見えないな。いつもは見えるのに。」

「うん、まん月だからね。」

ぼくはこたえて、よこ田でうちゅう人をぬすみ見た。しばらく見ない間に、ずいぶんせがのびたようだ。むかしは同じくらいだつたけれど、今はゆうとの方がちょっと大きい。

「ゆうと。」

「うん？」

「ごめんね。ようちえん生のとき、ぼく、ゆうとにひどいことした。」

「いいよ、気にしてないからさ。」

「よくないよ。ぜんぜんよくない。ゆうとはもつともいいはずだよ。ぼく、」

「だから、そう太……」

「ぼく、ゆうとのことかつてにキライになつて、むじしつづけて、それで、」

「いいつたら、」

「ゆうと、ほんとに……」

「それいじょう書つたら本当にいいね。」

「なみだ町になつたぼくに、ゆうとはわらいながらなぐるマネをした。」

「むかしのことだろ。おれら、おたがいにお子ちゃまだつたしや。ま、今も

ぱりぱり子どもだけだな。」

ゆうとは大きく口を開けてわらつた。ゆうとは、やつぱり……

「うちゅう人、いたんだよ。」

「え？」

「いるんだよ、うちゅう人。」

「いや、だから今までのでがみばずつとおれが……、」

「ゆうと、きみがうちゅう人だつたんだ。」

ゆうとはあゆみをとめてぽかんとしたかおでぼくを見つめる。ぼくはわらつて、「ぼくが友だちになりたかつたうちゅう人は、やさしい子だつたんだ。ゆうとだつたんだ。」

「しつかし、ほんとてがみびりつびりだな。」

ジャングルジムのてっぺんで、月明かりをたよりにてがみをよむうちゅう人はしじじゅうわらつていた。ぼくもわらつてへんじをする。

「ほんと、ごめん。」

「しかもこんなこつぱずかしいないう、よく書けたな。よむこつちもでれるよ。」

「ゆうとからひがみだつてそんなもんだつたよ。耳がくすぐつくなつた。」

「うわ、はずかしいな。」

「かわつてないね、ぼくたち。」

「そうだな、一年ぶりに会つたのに、しぜんにしゃべれてる。」

「会つてはなかつたけれど文つうしてたからね。」

「でも、まわか文つうのあいてがあれだと思わなかつたでしょ。うちゅう一人、しんじてただら？」

「うん、ゆうとにましてやられたよ。毎回じてん車でここの町まで来るの、たいへんだったでしょ。」





「うん、それなりには。でもたのしかったからけつかオーライかな。」

「それに、ぼく、今もうちゅう人しんじてるし。思つたとおり、ぼくが文つうしてたのはうちゅう人だつたし。」

「まあ、な。うちゅー人がおれでよかつたよ。ほんと。」

「自分で言つなよ。」

二人で声を上げてわらつた。あたたかい。ジャングルジムのまわりだけ、春みたいだ。

「ありがと。」

ぼくの家について、うちゅう人におれいを言つた。

「そう太、こんどあそぼうな。」

「うん。こんどはぼくが会いに行くから。」

「おう。まつてる。」

ふと、ぼくたちは空を見上げた。月明かりで星は見えにくかつたけれど、ひとすじの青白い光がまよなかの空にせんを引いた。

「あ、UFOがむかえに来た。」

ゆうとがわらつて手をふつた。

「またな。おやすみ、そう太。」

「うん。なかまのうちゅう人に、よろしくね。」

いつまでもじめんからとび立とうとしないじてん車にのつたうちゅう人の友だちを、ぼくはそのすがたが見えなくなるまで手をふつて見おくつた。